

第一日曜日
教会学校 9:00～
主日第一礼拝 9:00～
主日第二礼拝 10:30～

その他の日曜日
教会学校 9:00～
聖書を読む会 9:00～
主日礼拝 10:30～

日本基督教団 麻布南部坂教会月報

2019 (平成31年) 1. 13

牧師 松谷 祐二

〒106-0047 東京都港区南麻布4-5-6 Tel & Fax 03 (3473) 1276
E-mail church@nanbuzaka.com http://www.nanbuzaka.com/

印刷 有限会社 創文社 Tel (3491) 8321

聖書と祈り会
毎週水曜日 10:30～
成人会
第3日曜日 礼拝後
婦人会
第4日曜日 礼拝後
教会附属 南部坂幼稚園

「神の再創造の決意」

牧師 松谷 祐二

創世記 第六章九～一五、一七～二三節

これはノアの物語である。その世代の中で、ノアは神に従う無垢な人であった。ノアは神と共に歩んだ。ノアには三人の息子、セム、ハム、ヤフェトが生まれた。

この地は神の前に墮落し、不法に満ちていた。神は地を御覧になった。見よ、それは墮落し、すべて肉なる者はこの地で墮落の道を歩んでいた。神はノアに言われた。「すべて肉なるものを終わらせる時がわたしの前に来ている。彼らのゆえに不法が地に満ちている。見よ、わたしは地もろとも彼らを滅ぼす。

あなたはゴフェルの木の箱舟を造りなさい。箱舟には小部屋を幾つも造り、内側にも外側にもタールを塗りなさい。次のようにしてそれを造りなさい。…(中略)

見よ、わたしは地上に洪水をもたらし、命の霊をもつ、すべて肉なるものを天の下から滅ぼす。地上のすべてのものは息絶える。

わたしはあなたと契約を立てる。あなたは妻子や嫁たちと共に箱舟に入りなさい。また、すべて命あるもの、すべて肉なるものから、二つずつ箱舟に連れて入り、あなたと共に生き延びるようにしなさい。それらは、雄と雌でなければならぬ。それぞれの鳥、それぞれの家畜、それぞれの地を這うものが、二つずつあなたのところへ来て、生き延びるようにしなさい。更に、食べられる物はすべてあなたのごころに集め、あなたと彼らの食糧としなさい。」

ノアは、すべて神が命じられたとおりに果たした。
(新共同訳聖書)

「ノアの箱舟」として知られる物語の一部です。最初に神が愛をこめて創造され、「極めて良かった」とご覧になったはずの世界は、「肉なるもの」のゆえに、墮落し、不法に満ちてしまいました。

「肉なるもの」とは、神とは違って、弱く、すぐに死んでしまう存在、また、罪によって汚されやすい存在、を意味します。「肉なるもの」は、神からの「息」、「命の霊」をその内にいただけてこそ、生きられるのです。それが取り去られれば文字通り「息絶える」「死すべきものに過ぎません。

家畜、獣、鳥などを含むすべての生き物が「肉なるもの」ですが、「墮落の道を歩んでいた」のは、もちろん人間です。人間が、自らが「肉なるもの」に過ぎないことを忘れ、思い上がって、自ら神のように、神から独立して振舞おうとしたところから、墮落と不法が始まりました。これは科学的な論証による記述や正確な歴史的記述ではなく、物語、神話的な記述です。しかし、わたしたちの世界の現実を、これほどの確に表現した物語も、そう無いと思いません。

神は彼らを創造したことを後悔し、心を痛めます。わたしたち人間の悪というものを真剣に考えないと、神が洪水を起こさねばならなかった理由が分かりません。人間に命をくださったのは神であり、その神の愛に応答する責任がわたしたちにはある、という点を忘れて、「人間の命は尊い。人間はそれぞれ思うように、幸福に、長生きする権利がある」という点だけを当然視していると、人間の自己中心性や悪に思いが至らないのです。洪水のことを読むと、「聖書の神は、気まぐれに生き物の命を奪う残酷な神だ」という印象を持つだけに終わるかもしれません。

しかし、聖書の神は、愛した人間に裏切られた神、信頼した人間に自らの大切な作品を壊された神なのです。人間自身も神の大切な作品なのに、人間は自分をも壊しているのです。台無しにされた自らの作品を回収して破壊する、道義的にも正当な権利を神はお持ちです。神はその権利を行使しようとするれば、することができました。

ただ、神は「すべて肉なるものを滅ぼす」としながらも、生き延びるものを残すようにされます。神に従う無垢な人、神と共に歩み、すべて神が命じられた通りに果たす一人の人と、その家族を、すべて肉なるものの雄と雌を。明らかに神は、

「エンド」にするというより「リニューアル」しようという決意されています。悪や腐敗をすべて拭き去ったうえで、新しい天と新しい地を、言わば再創造しようというお考えです。

ノアは箱舟を造るよう命じられ、家族、すべての動物と共に箱舟に入り、地上を覆い尽くした洪水による滅びから救われました。水が引いて、再び乾いた地に立つことを許されたとき、彼らはまず、祭壇を築いて神を礼拝しました。その礼拝の中で、神は宣言されます。わたしは、あなたたちとその子孫、またすべての生き物、すべて肉なるものとの間に永遠の契約を立てる。わたしが契約を立てたからには、「二度と洪水によって肉なるものがごとく滅ぼされることはない」と。

神はもう二度と洪水ですべてを滅ぼすことはなさらない。本当でしょうか。なぜでしょうか。生き延びたノアとその子孫以降は、美しい世界が再生され、もはや墮落も腐敗も起こる心配がなかったからでしょうか。いいえ、聖書の記述でも、現実の世界でも、そんな展開にはなっていない。

前後をよく読むと、神は「人に対して「人のゆえに」大地を呪うことは二度とすまい。…この度したように生き物をことごとく打つことは、二度とすまい」(第八章二節)と心の中で言われています。この洪水では、人間の悪のゆえに、大地も、人間以外の生き物も、すべて一緒に滅ぼされました。それをもう二度としない、ということは…。これからは、人間の責任はあくまで人間に取らせる、ということではないでしょうか。

より積極的に言えば、神は、人間を、ほかでもないわたしたち人間を、何とかして「極めて良い」ものに回復しようと決意なさったのです。それを果たすまで、他のすべての生き物も大地も、滅ぼすようなことはすまい。何よりも、古き人から新しき人への再創造を。それなくしては、新しい天と新しい地の再創造は完成しない。

やがて神が一人の人を世に送られたのは、この決意に基づいてでした。神の再創造の使命を帯びたその人こそ、神に従う無垢な人、神と共に歩み、すべて神が命じられた通りに果たす、神の子です。

二〇一九年新年礼拝

六 戸 信次郎

二〇一九年の元旦、渋谷の東京山手教会で行われた新年礼拝に参加しました。

東京山手教会は一九六六年に建堂された大きな教会で、日本基督教団東京教区の長い歴史の中で、大切な場面で何度となく用いられてきた教会です。新年礼拝は五年ぶりとのことでした。

駒澤教会の北川美奈子牧師から、ルカによる福音書第二章二十二節〜三十八節を用いて「はじまりに向かって」と題した説教を頂きました。

二〇一八年が終わり、新しい年が始まる。互いに、明けましておめでとうと挨拶を交わし、新しい年に希望を持つ。終わりがあって、始まりがある。入学して、卒業がある。始まりがあり、終わりがあある。駒澤教会が自立することが困難になり、二〇一七年頃から新しい道を探っていたが、近隣の三軒茶屋教会に吸収合併される方向が示された。今年三月末で駒澤教会の役割は終わるが、三軒茶屋教会として新しい希望を持つことが出来た。

ヨハネの黙示録においてヨハネは、新しい天と地を語り、万物は新しくされるといふ、神から与えられる希望について語った。



今日与えられたルカによる福音書では、赤ちゃんのイエスが、ヨセフとマリアに連れられて神殿に昇った時、シメオンはごく自然にイエスを抱いた。シメオンは主を見るまでは死ぬことは無い、と言われ、救い主が現れるのを待っていた人であった。話すことさえできない幼いイエスを見て、シメオンは救い主としての将来を確信し、自分を安らかに死なせてくれる神に感謝して、御名を褒めたたえることが出来た。アンナもまた、幼子の出現により、全く違う時が始まったことを確信し、神を讚美した。私たちも主が再び来てくださる、という神の約束によって、死の先にある見通しを与えられている。人生の歩みにおいて、始まりと終わりを経験する。終わりが全ての終わりではなく、その先に新しい始まりがある、という確信があるから、いつも新しい始まりに向かって歩いていける、と力強く語られました。

大きな教会の中に讚美の歌声が満ち溢れる新年礼拝は、いつも嬉しくなります。私は、西南支区の中でも、教会が合併せざるを得なくなるという現実、衝撃を受けましたが、他の教会のことと、聞き流すこと

は出来ません。教会の将来について、改めて想いを新たにしました。

新年礼拝では聖餐式も行われましたが、広い会堂での配餐に、二十分近くかかりました。礼拝後、西南支区の三十八教会から二八二名の参加があったと、報告がありました。十年近く前、東京山手教会における新年礼拝でもっとたくさんの礼拝出席があったように記憶しています。ちよつと残念な気分です。

今年も、いろんな問題を抱えて、一年が始まります。どんな時にも、主のお支えがあることを信じて、信仰生活を歩んでいきたいと思ひます。

報 告

* 十二月八日(土)、東京神学大学のオーブンキャンパスが開かれました。

* 南部坂幼稚園では、十三日(木)のクリスマス礼拝で二期期が終了し、冬休みに入りました。

* 十二月二十三日(日)の降誕祭礼拝後、クリスマス祝会を行いました。例年通り、持寄り形式で食事をし、楽しい時を過ごしました。

* 水沼和子姉は、十二月二日付で日本基督教団安藤記念教会へ転出されました。

* 十二月二十四日(月)午後七時より、聖夜礼拝を捧げました。約七十名の方が参加されました。

* 「信徒の友」十二月号の「日毎の糧」欄に当教会の紹介が掲載されたのを受け、祈禱会などで覚えてお祈りくださった諸教会、信徒の方々から、お葉書を多数いただきました。

* 各献金(熊本・大分地震被災教会支援献金、東京神学大学後援会献金、隠退教師を支える運動、神学生を支える献金、会堂建築献金、オルガン献金)へのご協力を、引き続き宜しくお願いします。

《各部報告 十二月度》

成人会

日時 十二月十六日 主日礼拝後

場所 教会堂会議室

出席者 四名

開会祈禱 菊池才知子姉

内容

◇ミカ書一章から七章まで B.C. 七四〇〜六八〇年南ユダ王国ベリシテ国境のモレシエトに住むミカ、イザヤと同時代の預言者による書物。北イスラエル、南ユダ王国共に、役人の腐敗、不正が横行する危機的状態にあったことをミカは告発している。

アッシリアの攻略も迫っており、主の嘆きは(一・八〜一六)災いとなりエルサレムが陥落すると預言している。第二章 社会の不正が災いとなり、主によって与えられた嗣業の土地が侵略者に奪われても、それを取り戻して再び分配されることはない。二・六〜七 二七預言者たちは耳に痛いミカの預言を排斥した。二・八 二七預言者を敵とする神の言葉。二・十二、十三 復興を予言する神の言葉。三章 イスラエルの指導者たちの不正を告発するミカの預言。四章 一〜十三節まで主の救いの言葉。十四節 イスラエルが外国に屈する現実を述べている。五章一節 東方の三博士たちの言葉(マタイ二・六)になっている。

二・八節 北のイスラエル、ユダに対して厳しい終末的な預言。五・十四 イスラエルの敵に対して主は報復される。六章 強弱いものが弱者から奪っている不正を主が告発している。六・九〜七・五節 イスラエルに正しいものがいなくなってしまうたと主が嘆く。イエスキリストの登場を予告する書物。

次会は、ナホム書及びハバクク書次回司会…一月十五日 司会は佐藤忠昭兄開会祈禱 黙禱

婦人会

クリスマス祝会に合流